



Data	2024-39
監督・脚本・編集: チェン・アル	
出演: トニー・レオン / ワン・イー	
ボー / ホアン・レイ / 森博之	
／チャン・ジンイー / ジョ	
ウ・シュン /	

👁️👁️ みどころ

「スパイもの」の傑作は『007』シリーズや『ボーン』シリーズだけ！いやいや、さに非ず。ジェームズ・ボンドは“殺しのライセンス”を持つスパイとして超有名だが、日中戦争時代の汪兆銘政権のスパイはみんな“無名”だ。

中国のスパイ映画の傑作は婁燁（ロウ・イエ）監督の『パープル・バタフライ』（07 年）（『シネマ 17』220 頁）や『サタデー・フィクション』（19 年）（『シネマ 54』90 頁）だが、近時、張芸謀（チャン・イーモウ）監督も『崖上のスパイ（懸崖之上）』（21 年）（『シネマ 54』64 頁）を発表。軍事・経済面と同じく、スパイ映画でも今や中国は米国に負けてはいない。そんな時代状況下、1999 年に北京電影学園を卒業した程耳（チェン・アル）監督が、1940 年代の“魔都”上海を舞台にしたスパイ映画の傑作を公開！

浅利慶太演出の劇団四季のミュージカル『異国の丘』（01 年）（『シネマ 1』98 頁）は、日中戦争が泥沼化する中、九重菊麿総理の息子と蒋介石政権の司法大臣の娘が日中和平のために尽力する姿を描いた感動作だったが、本作は汪兆銘政権 vs 中国共産党のスパイ合戦の中に、満州国の繁栄を願う日本軍スパイが絡んでくるところがミソだ。

陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『さらば、わが愛/霸王別姫』（93 年）（『シネマ 5』107 頁）や、張芸謀監督の『活きる』（94 年）（『シネマ 5』111 頁）でも描かれていた時代背景と対比しながら、じっくり楽しみ、かつ勉強したい。なお、本作は中国で約 181 億円を上回る大ヒットを記録したそうだが、その理由は字幕が流れ終わった後のワンシーンにある（？）ので、決してそれを見逃さないように！

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■中国映画界で「スパイもの」の傑作が次々と！■

中国映画大好き人間の私は当然、張芸謀（チャン・イーモウ）監督が大好きだが、それ以上に婁燁（ロウ・イエ）監督が大好き。初期の『ふたりの人魚』（00年）も良かったが、『シネマ 34』収録の『スプリング・フィーバー』（09年）、『パリ、ただよう花 Love and Bruises』（11年）、『天安門、恋人たち』（06年）も、『シネマ 44』収録の『二重生活』（12年）も、さらに『シネマ 17』収録のスパイもの『パープル・バタフライ』（07年）も最高だった。そんなロウ・イエ監督の直近のスパイものの傑作が『サタデー・フィクション』（19年）（『シネマ 54』90頁）だった。

他方、チャン・イーモウ監督の代表作は言うまでもなく『紅いコーリャン（紅高粱）』（87年）（『シネマ 5』72頁）だが、彼の作品の幅は広く、『シネマ 5』に収録した「幸せ三部作」と呼ばれている『あの子を探して』（99年）『初恋の来た道』（00年）『至福のとき』（02年）以降も次々と傑作を発表している。直近の「スパイもの」の傑作が『崖上のスパイ（懸崖之上）』（21年）（『シネマ 52』226頁、『シネマ 54』64頁）だった。

このように、なぜか今中国の映画界では「スパイもの」傑作が次々と誕生しているが、そんな中国映画の「スパイもの」の傑作として新たに、1976年に生まれ、1999年に北京電影学院を卒業した程耳（チェン・アル）監督による本作が完成した。本作は中国映画最高の栄誉である第36回金鶏賞最優秀監督賞・編集賞を受賞するとともに、中国で約181億円を上回る大ヒットを記録したそう。そのチラシには「映像美に浸るスパイ・ノ

ワール」「信じるか、裏切るか。究極の心理戦」の見出しが躍っている。これは必見！

■舞台は『兰心大劇院』と同じ上海！その異同は？■

『サタデー・フィクション』の舞台は“魔都上海”の英仏租界。そして、物語は「太平洋戦争開戦前の七日間に繰り広げられる 日本海軍少佐と女スパイの偽りの愛と策略の物語・・・」で、1941年12月8日の真珠湾攻撃直前の1週間を1日ごとに描いたスリリングなものだった。また、同作の主演は、“人気女優”を表の顔としながら、裏の顔は“女スパイ”という“イーモウガール”第1期生の鞏俐（コン・リー）、共演者は、暗号解読を専門とする日本海軍少佐役のオダギリジョーだった。さらに、女スパイ役を演じたコン・リーは女スパイと瓜二つの海軍少佐の妻、美代子役も演じたから、すごい。隠語「山桜（ヤマザクラ）」を巡る物語は、メチャ面白いものだった。

そんな同作に対して本作は、中華民国・汪兆銘政権の政治保衛部のフー主任（トニー・レオン）とその部下のイエ（ワン・イーポー）の2人が主人公だ。時代の設定は『サタデー・フィクション』と同じ1941年、舞台も同じ上海だが、本作は『サタデー・フィクション』より少し前だから、フーとイエの2人は上海に駐在する日本軍のスパイのトップ渡部（森博之）と密に連絡をとりながら諜報活動を行っているところがミソだ。

本作前半では、1938年の日本軍による広州爆撃を生き延びたフーが今は保衛部の主任としてタン部長（ダー・ボン）の下でイエとワン（エリック・ワン）を部下として使いなが

ら諜報活動を行っている姿が、ロウ・イエ監督と同じようなモノトーンの緊張感いっぱいのスクリーン上で展開していくのでそれに注目！

冒頭に見る 1938 年当時のフーが、「汪兆銘に感銘を受け、残りの人生は中国国民党に転向するのだ」と語る、かつて中国共産党の秘密工作員をしていたジャン（ホアン・レイ）から事情聴取をする姿は興味深い、その結末は・・・？フーが、ワイシャツに残った血痕のような痕を洗っていたのは一体なぜ？

また、1941 年当時、政治保衛部の主任に昇格したフーが、任務に失敗して処刑されるはずだった国民党の女スパイ江（ジャン）（ジャン・シューイン）を密かに助けたことの代わりに、上海に住む日本人要人リストを手に入れることに成功する姿も興味深い。

なるほど、こんな姿を見ていると、スパイ稼業とはすなわち人を騙すことだということがよくわかる。こんな仕事を長年していれば次第に神経がやられ、人間性が歪んでくるのは当然かも・・・。

■□■汪兆銘政権とは？近衛文麿内閣の日中和平への努力は？■□■

私が日曜日の東京出張に伴って、2001 年 11 月の日曜日にわざわざ東京の四季劇場まで行って観劇したのが、浅利慶太演出による劇団四季の『異国の丘』だった。このミュージカルはそのタイトルからわかる通り、吉田正作曲の「今日も暮れゆく異国の丘に、友よつらから、せつなから・・・」と切々と歌われる名曲『異国の丘』（48 年）をモチーフにしたものだ。日本への帰国が絶望的と悟った兵士が、帰国する兵士に、「書面はすべて没収される。口で伝える私の遺言を覚えてほしい。そして日本で待っている妻や子に私の遺言を伝えて欲しい」と述べて、遺言を口述する場面では、涙がポロポロと溢れるのを抑えることができなかった。

同作の“泣かせどころ”はそこだが、ストーリーの骨格は、九重秀隆と愛玲による、日中戦争の泥沼化を避けるための和平工作の展開にある。九重秀隆は時の総理大臣、九重菊麿の息子、愛玲は時の中国の最高権力者、蒋介石政権の司法大臣の娘という設定だ。『異国の丘』のドラマ展開は手に汗を握るものだったが、同作でも蒋介石率いる国民党と毛沢東率いる中国共産党の抗争や日本の傀儡政権である汪兆銘政権の理解が不可欠だったが、それは本作も同じだ。1941 年当時、蒋介石はいかなる役割を？そして、近衛文麿内閣は日中平和にむけていかに努力を？

ちなみに Wikipedia によると、日本の傀儡政権だった汪兆銘政権とは次の通りだから、そのお勉強もしっかりと！

汪兆銘政権（おうちょうめいせいけん）は、1940 年 3 月 30 日から 1945 年 8 月 16 日にかけて存在した、中華民国の国民政府。日中戦争における日本軍占領地に成立した政権であり、一般に日本の傀儡政権と見做されている。

政府の正式名称は中華民国国民政府（ちゅうかみんこくこくみんせいふ）だが、初代元

首（国民政府主席兼行政院長）である汪兆銘（汪精衛）の名を冠した政権名で称されることが多い（名称に関しては後述）。統治原理は三民主義であり、スローガンは「和平・反共・建国」。首都は南京、最大都市は上海。

■□■「石原派」とは？スパイの人物像は？観察眼に感服！■□■

本格的な日中戦争は1937年8月13日の第2次上海事変から始まった。しかし、その導火線が1931年9月18日の満州事変、さらには、その直前の1928年6月4日の張作霖爆殺事件にあったことは歴史上明白だ。そこで問題は、日清（1894～95年）・日露（1904～95年）両戦争に勝利した日本が、なぜ中国大陸東北部に進出し、満州国の建設を目指したのか？ということだ。日露戦争当時は固い「日英同盟」の下で英国と親密な関係にあった日本は、中国大陸東北部への進出を強め、溥儀を擁立して満州国を建設するに至って、英国との関係はもとより、欧米列強との関係を悪くしてしまった。その挙句に日本は1935年に国際連盟を脱退するに至ったが、それもこれも日本が満州国に固執したためだ。

今、私の手元には、歴史家鈴木莊一著の毎日ワンズの新刊、『満州建国の大義』の新聞広告がある。そのテーマは「石原莞爾とその告白」らしい。そして、その新聞広告には「東条英機を東条上等兵と呼び、私が指揮していればアメリカに勝っていた、と豪語した石原莞爾とは何者だったのか？大ヒット作『ロシア敗れたり』の著者が放つ衝撃の満州建国史！」の文字が躍っている。しかして、あなたは石原莞爾なる人物（軍人）のことをどこまで知ってる？

本作はトニー・レオンとワン・イーボーという2大スターの共演だが、全体のストーリーを牽引するのは、当時汪兆銘政権を事実上支配していた日本軍のスパイのトップ、渡部だ。そして中国映画には珍しく、本作では、渡部が「石原派」を自称していることが強調され、反東条の立場が明確にされるとともに、満州国の建国とその経営こそが日本の生命線だと確信していることが強調されているので、それに注目！本作の脚本を書き監督した程耳（チェン・アル）氏は1999年に北京電影学院を卒業した俊英だが、彼はなぜそこまで当時の日本の軍部の実情を把握し、日本人スパイ渡部の人物像を明確に確立できたの？そのことに私は感服せざるをえない。

ちなみに、それらの全貌を日本人の視点から明確に描いた歴史大作が、山本薩夫監督の『戦争と人間』3部作（『シネマ2』14頁、『シネマ5』173頁）、そして中国映画の名作が張婉婷（メイベル・チャン）監督の『宋家の三姉妹』（『シネマ1』59頁、『シネマ5』170頁）だった。本作で描かれた中国の近代史のエッセンスを、より全般的かつ体系的に理解するためには、ぜひこの両作も合わせて観賞したい。

■□■日中戦争はなぜ泥沼化？和平工作はなぜ失敗？■□■

2022年2月24日のロシアによるウクライナへの侵攻から始まったウクライナ戦争も、2023年10月7日の大量のロケット弾攻撃と大量の人質奪取から始まったハマス vs イスラ

エル戦争も、2024年5月現在、泥沼化している。それと同じように、1937年8月13日の第2次上海事変から本格化した日中戦争も次第に拡大し、泥沼化していった。時の近衛文麿内閣は、「不拡大方針」を打ち出すとともに、「国民政府を相手とせず」との声明を発表して、傀儡の汪兆銘政権を樹立し、さまざまな和平工作を展開したが、そんな近衛首相の思惑通りに中国大陆の情勢は進展せず、中国大陆における日本軍の戦線は次第に拡大していった。そんな風に泥沼化する日中戦争の裏で、ミュージカル『異国の丘』で見たような(?) 和平工作が展開されたわけだが、それも成功しなかった。

他方、2024年4月30日付読売新聞夕刊の「日本史アップデート」は、日中和平工作をテーマに、次の年表を掲げて詳しく解説している。また、「ここに注目！」の欄では次の通りまとめているので、これもしっかり勉強したい。

日中和平工作関連年表	
1937年7月	盧溝橋事件。日中戦争始まる
1937年8月	上海で日中両軍が交戦を始め(第2次上海事変)、全面戦争に拡大
1937年12月	南京陥落
1938年1月	近衛文麿首相が「国民政府を相手とせず」と声明。トラウトマン工作打ち切られる
1940年3月	汪兆銘を首班とする南京国民政府が成立
1940年10月	桐工作を正式に打ち切り
1941年12月	真珠湾攻撃で日米開戦
1945年8月	終戦

・日中戦争で様々な和平工作が試みられ、最も実現可能性があったのは、ドイツの外交官が仲介した「トラウトマン工作」だった。当初は比較的穏当な和平条件だったが、南京を陥落させた日本が、賠償など厳しい条件を突きつけたため成功しなかった。日本は「国民政府を相手とせず」との声明を発表し、日中戦争は泥沼化していった。

ここに注目!

・声明後、いくつも和平工作が試みられたが、失敗した。中国が受け入れ可能な和平案をまとめるリーダーシップが、近衛文麿首相ら日本の政治指導者に不足していた。

・日中和平工作に深く関わった陸軍軍人、今井武夫の日記を含む関係資料が1月から、国立国会図書館憲政資料室で公開され、和平工作の研究進捗が期待されている。

■若者には思想闘争の中にも男女の恋が！フーの恋人は？■

来る5月31日から公開されるロウ・イェ監督の『天安門、恋人たち（頤和園／Summer Palace）』（06年）（『シネマ34』300頁）は、1989年の天安門事件と若き恋人たちをテ

一マにしたチョー問題作だ。同作によってロウ・イエ監督は 5 年間の映画制作禁止の処分を受けてしまったが、同作を見れば、天安門事件という一大政治闘争、権力闘争の中でも、若者たちの間では、激しくも悩ましい男女の恋物語が展開していたことがよくわかる。そしてそれは、1967 年に大学に入学した後、私が学生運動の中で体験したこととも同じだ。そんな私だから、本作を見てみると、日中戦争の中でもなお国内抗争として繰り広げられていた、蒋介石率いる国民党 vs 毛沢東率いる中国共産党の対立という構図をよく理解することができる。

ロウ・イエ監督の『サタデー・フィクション』はそこに日本と東欧のスパイを絡ませていたが、本作でスパイのメインを張るのは、汪兆銘政権の政治保衛部のフー主任とタン部長、そして満州国の繁栄を確信しながらそれを応援する日本軍スパイの渡部だ。

しかし、『サタデー・フィクション』と同じように、そこでの大きな問題は国民党政府の中にも、汪兆銘政権の中にも、中国共産党のスパイが入り込んでいることだ。日本人にはそこら辺りの複雑な事情が分かりにくいのが、本作では、イエの婚約者でもある女スパイのファン（チャン・ジンイー）が中国共産党のスパイではないかと疑いがかけられ、イエの同僚のワンがその調査に入ったところから揉め始めるので、それに注目！

本作は近時の「何でも説明調」の邦画のように、ベラベラとセリフが流れてくることはないで、各人の表情からその意思を読み取らなければならないが、イエの同僚であるワンもどうやらイエの恋人である美人スパイのファンに気があるようだ。しかし、いくらそうであっても、スパイとしての大切な任務を担っている以上、ワンに“公私混同”が許されないのは当然だ。ところが、チェン・アル監督が描く本作のストーリーでは、ワンとファンが出会った翌日、ファンの死体が発見された上、その着衣には乱れがあったそうだから、アレレ。そんな報告を聞いたイエの状況判断は如何に？

■□■フー主任は任務一筋？いやいや彼にもこんな女が！■□■

本作は「2 大スター共演のスパイ・ノワール」と謳われている。2 大スターとはトニー・レオンとワン・イーポーのことだが、そのウエイトは当然トニー・レオン方に置かれている。香港出身の若手イケメン俳優トニー・レオンを一躍世に出したのは王家衛（ウォン・カーウアイ）監督。とりわけ、『花様年華』（00 年）（『シネマ 5』250 頁）が彼の出世作になったが、『恋する惑星』（94 年）（『シネマ 5』257 頁）も『ブエノスアイレス』（97 年）（『シネマ 5』234 頁）も面白かった。

他方、ロウ・イエ監督の『ふたりの人魚』ではじめて見た、若き日の美人女優・周迅（ジョウ・シュン）はまるでお姫様だった。そしてそれは「小さな中国のお針子」（02 年）（『シネマ 5』294 頁）でも同じだった。そんなジョウ・シュンの女優としての成長は著しく、「レッドクリフ」（08 年）（『シネマ 34』73 頁）での大活躍を始め、「三大映画祭を制覇した初

の中国人俳優」としてハリウッドにも進出。さらに、岩井俊二監督の『チファの手紙』（18年）では日本映画にも出演しているからその多方面にわたる活躍はすごい。本作中盤はそんなジョウ・シュンが登場するが、彼女は1974年生まれだから既に50歳。さて彼女の役は？『サタデー・フィクション』では1965年生まれのコン・リーが、現役バリバリの女スパイとして、また一人二役（三役？）の役割で奮闘していたが、さすがに本作におけるジョウ・シュンの役割は控えめなものだからその設定に注目！

本作はフラッシュバックの手法がたくさん使われている。これはロウ・イエ監督とも共通するチェン・アル監督の一つの演出手法だが、その展開は実にお見事だ。一見しただけでは何のことかわからないが、「アレレ、これは一体何？」と謎をかけておいて、ある時点で突如、フラッシュバックでそのネタバラシをするスタイルは実にお見事だ。その上、今や50歳の熟女になった女優ジョウ・シュンに、「かつてスパイ活動に疲れ、5年間共に暮らした女性」、そしてまた「今は遠く離れて暮らしているフー主任の妻」という役割を与え、彼女を中国共産党 vs 国民党 vs 日本軍+汪兆銘政権という全体構図の中に組み込んだ脚本はさすがだ。イエの婚約者たる女スパイのファンや、任務に失敗して処刑されるはずだった国民党の女スパイのジャン等の美人スターに並んで、ジョウ・シュンがそれなりの役割と存在感を見せる本作のストーリーをしっかりと味わいたい。

■□■2大スターの壮絶なバトルに注目！その結末は？■□■

本作最大の見どころは、チラシに謳われている通り、「2大スター競演のスパイ・ノワール」であり、ストーリーの核は「信じるか、裏切るか。究極の心理戦」だが、近時のスパイものやエンタメ作品には壮絶な肉體バトルが不可欠だ。中国で一世を風靡したアクション俳優は、若くして亡くなったブルース・リーや今なお現役で活躍を続けているジャッキー・チェンだが、トニー・レオンもアクションでは負けてはいない。また、若手人気俳優のワン・イーポーはダンサーとしての能力も高く評価されているから、アクションはお手のものだ。

汪兆銘政権の政治保衛部のスパイとして、日本軍スパイのボスである渡部と協力しながら、共産党スパイの対策を行っている時は、渡部、タン部長、フー主任、イエ、ワンたちの結束は固かった。しかし、ワンがイエの追及の前に、イエの婚約者だったファンを殺した理由が「共産主義者だからだ」と答えると、怒りに燃えたイエはついにフーのアジトに乗り込み、壮絶な銃撃戦と肉弾戦を繰り広げることに。私は昔からプロレスのファンで、ジャイアント馬場やアントニオ猪木の時代からTVを鑑賞していたが、それは今も続いている。時代の変化の中でプロレスの技も大きく変わり、今や華麗な空中戦が多くなっているが、スパイものの映画中のアクションも、『007』シリーズや『ボーン』シリーズ等が次々とヒットする中で大きく変化している。中国映画は1980年代にやっと世界に認められた新興勢力だが、その実力は今や軍事・経済力において「アメリカに追いつき、追い越せ」

を狙っている中国と同じで、ものすごいものがある。「スパイもの」の本作で、チェン・アル監督が見せる、2 大スターによる本格的なアクションは、とりわけ素晴らしい見どころになっているので、それにも注目！

■日本に勝利！スパイたちの勝者は？敗者は？■

陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『さらば、わが愛/霸王別姫』（93 年）（『シネマ 5』107 頁）は京劇俳優を志す二人の若者にコン・リーを絡めたメチャ面白い映画だった。しかも、同作は日中戦争や文化大革命等、激動の中国現代史の中でそのストーリーを展開させたから、その面白さは群を抜いていた。また、チャン・イーモウ監督の『活きる』（94 年）（『シネマ 5』111 頁）も 1940 年代、50 年代、60 年代の激動する中国現代史の中で、翻弄されながらも懸命に生き抜く夫婦の姿をイキイキと描いた素晴らしい映画だった。

それに比べれば、本作は本職（天職？）をスパイとするフーとイエの 2 人の男の生きざまを「スパイ・ノワール」として描くものだから、日中戦争が日本の敗北に終わり、満州建国の夢が潰えてしまった時点で、スパイたちの勝者と敗者が別れてしまうのは当然だ。すると当然、渡部は処刑され、汪兆銘政権のスパイだったフーもイエもアウト！そう思うのだが、多分コトはそれほど単純ではないだろう。だって、汪兆銘政権・政治保衛部のスパイでありながら、イエはあれだけはっきりとフー主任やタン部長に盾突き、本部に殴り込みをかけたのだから。もっとも、「2 大スターの壮絶バトル」は、いくら激しくても両者とも死なないのが鉄則だ。

1945 年 8 月 15 日の終戦を迎えると、刑務所から出てきたフーの前には、逮捕された渡部と共に捕まったイエの姿もあったが、渡部もイエも含み笑い（？）をしていたから、きっとその後の展開は微妙だ。そう思っていると案の定、舞台は香港へ。さあ、事態はどうなるの？それはあなた自身の目でしっかりと。

しかも、本作はエンドロールが流れ終わった後、ファンの死亡をめぐるイエとワンの会話の中で、あっと驚くイエの心情が露呈されるので、それを見逃すことのないように。なるほど、なるほど、この最後のセリフによって、本作の興行上の成功は約束されたようなもの・・・？

2024（令和 6）年 5 月 16 日記